設楽発掘通信

No.36
平成 30 年
5 月号

平成三十年度の発掘調査が始まります

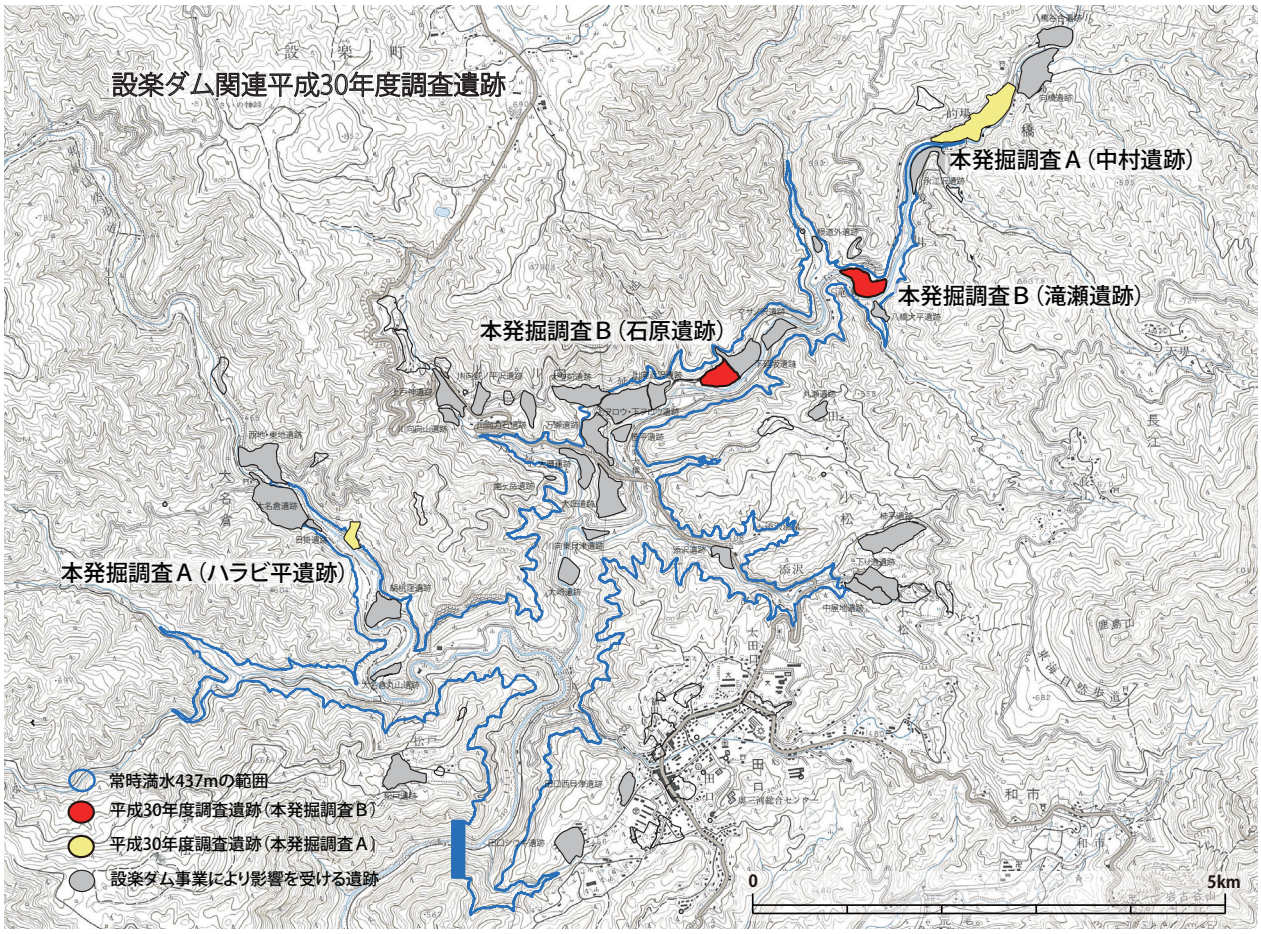
今年度も昨年度に引き続き、愛知県埋蔵文化財センターが中心となって、設楽ダム関連事業に関わる発掘調査を実施して参ります。設楽ダムに関わる工事予定地や水没する地区には数多くの遺跡がありますが、工事によって失われたり水没したりする遺跡については、事前に遺物を取り上げて遺構などの記録を残す必要があることから、この発掘調査が行われています。

平成三十年度には、本調査を行う必要がある区域を調べる本発掘調査A（いわゆる範囲確認調査）と、遺跡の滅失する範囲の全体を対象とする本発掘調査B（いわゆる本調査）を実施する予定です。本発掘調査B（いわゆる本調査）を行う遺跡は川向地区の石原遺跡と八橋地区の滝瀬遺跡の二遺跡です。また、本発掘調査A（いわゆる範囲確認調査）を行う遺跡は八橋地区の中村遺跡と大名倉地区のハラビ平遺跡の二遺跡です。発掘調査を担当するのは鈴木正貴、川添和暁、永井邦仁、早野浩二、田中良の五名の調査員で、安西工業株式会社の支援を受けて進めて参ります。調査を円滑に行うには、地元の皆様にご理解を頂くことが最も大事と考えています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

また昨年度から、すでに発掘調査を終えた遺跡の整理作業にも着手しており、平成三十年度は、平成二十二・二十七・二十八年度の三か年にわたって発掘調査を行いました川向地区の川向東貝津遺跡の整理作業を、弥富市にある愛知県埋蔵文化財調査センターで行い、樋上昇が担当します。また、昨年度に整理調査いたしました西地・東地遺跡の発掘調査報告書は今年度末に刊行される予定です。

昨年度までと同様に、設楽町田口の旧県保健所の愛知県埋蔵文化財センター設楽事務所を拠点として、『設楽発掘通信』を発行し、各遺跡の地元説明会などを開催して、調査成果などをお知らせする予定です。どうぞご期待下さい。

（愛知県埋蔵文化財センター　鈴木正貴）



今年度の発掘調査予定遺跡を紹介します

いよいよ五月から平成三十年度の発掘調査が始まります。ここでは今年度発掘調査を予定している四遺跡について紹介します。

石原遺跡

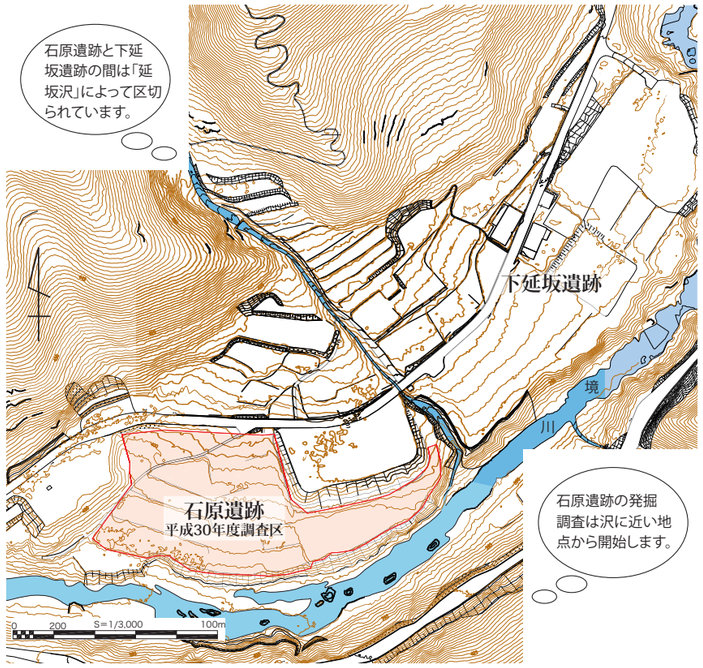
石原遺跡は川向地区にあります。境川右岸の河岸段丘面から背後の斜面地にかけて広がっています。昭和四十三（一九六八）年刊の『北設楽郡史　原始～中世』では、縄文土器と石器（石匙）が出土していることが記載されており、古くから縄文時代の遺跡として知られていたようです。なお石原遺跡と沢を挟んだ北東側には下延坂遺跡があります。現在は沢で分かれているものの、ともに広い段丘面に立地するという共通点があり、おおむね二つの遺跡をひとまとまりのものと捉えることができるでしょう。

ところで石原遺跡と下延坂遺跡の範囲については、平成二十八年度に行った範囲確認調査（今年度の本発掘調査Aに相当します）の成果に基づいています。この調査はトレンチ調査（左写真）という手法で遺跡推定地における遺構や遺物の分布状況を確認するものです。それによると石原遺跡では、表土（もと耕作土）の下に黒色土の堆積する地点が広範囲にみられ、縄文土器などの土器が二一か所のトレンチで出土しました。特に今年度発掘調査を行う段丘面での出土が目立っています。このことから、段丘面に縄文時代の集落遺跡がある可能性が高いと考えられます。また境川沿いには、多数の竪穴建物跡が検出された笹平遺跡や、昨年度の発掘調査で縄文時代後期の土偶が出土したマサノ沢遺跡などが分布しており、これらとの関連も注目されます。

平成 28 年度範囲確認調査のようす

中村遺跡・ハラビ平遺跡

中村遺跡とハラビ平遺跡は、今年度本発掘調査Ａ（いわゆる範囲確認調査）が予定されている遺跡です。中村遺跡は八橋地区にある遺跡で、平成二十一年度にも境川近くで範囲確認調査が行われ、古代～中世の遺跡であることがわかりました。一方、ハラビ平遺跡は大名倉地区にある遺跡で、こちらは平成二十七年度に県道付近で範囲確認調査が行われ、縄文時代中～後期の土器が出土しています。



石原遺跡と下延坂遺跡の地形図

（平成 28 年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会『新設楽発見伝３』を改変）

滝瀬遺跡

八橋地区にある滝瀬遺跡は、境川右岸の河岸段丘面を中心に広がる遺跡です。これまでに平成二十七・二十八年度に発掘調査が行われ、縄文時代早期～中期前半とみられる集石遺構群や、縄文時代中期後半～後期中葉の竪穴建物跡群が検出されています。集石遺構とは、加熱した石を使って蒸し焼き調理をしたと考えられる遺構で、可能性のあるものを含めると九基が確認されています。また縄文時代早期の押型文土器や、石鏃に似た形をしていますがその用途がよくわかっていないトロトロ石器も出土しています。このことから、縄文時代の各時期にわたって人々が集落を営んでいたと考えられます。

また滝瀬遺跡では、縄文時代の後にも生活がなされた痕跡が明らかになっています。例えば一六Ｂｃ区では、弥生時代末～古墳時代初頭の壺や高杯などの土器が出土しています。この時期の土器が設楽地区で出土するのはきわめて稀なことで、どのような目的でどこからやってきた人々なのか興味深い事例です。このほか、平成二十五年度の範囲確認調査では平安時代の灰釉陶器も出土しています。さらに少し変わった遺構として近代まで伊那街道として使われていたとみられる道路跡も検出されています（下写真）。

さて今年度の滝瀬遺跡では、主に県道一〇号設楽根羽線から北側の斜面地で発掘調査が行われます。この一帯は平成二十八年度に範囲確認調査が行われ、石原遺跡と同様のトレンチ調査で遺構や遺物が確認されています。特に県道の近くでは黒色土の堆積も確認されているので、これまでの発掘調査で検出された縄文時代の遺物を含む層（遺物包含層と言います）の続きがあるものと推測されます。一方そこから高い斜面地では表土のすぐ下で基盤層と考えられる黄褐色の粘土層があり、黒色土の堆積は少ないようです。しかし石器剥片に加えて鎌倉時代の山茶碗や戦国時代の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しているので、この区域にも生活の痕跡があったと推測されるのです。このように、地形の違いによって検出される遺構や遺物の時代や時期が変わってくることも予想したうえで発掘調査に臨んでいく必要があります。

（愛知県埋蔵文化財センター　永井邦仁）

東から見た滝瀬遺跡の平成二十八年度調査区全景

（平成二十八年度設楽ダム関連遺跡発掘調査成果報告会『新設楽発見伝３』を改変）

マサノ沢遺跡の土偶を弥富市で展示！

平成二十九年度の発掘調査で出土したマサノ沢遺跡の土偶が、愛知県弥富市にある、愛知県埋蔵文化財調査センターで開催された『春の埋蔵文化財展』（四月四日～十三日）で展示されました。『春の埋蔵文化財展』は、前年度に愛知県内で行われた国や県関係の発掘調査で出土した遺物を展示するもので、毎年春のこの時期に開催しています。遺物とともに遺跡について紹介する解説や写真パネルも掲示して、最新の調査成果を公開しました。

マサノ沢遺跡の土偶は、ガラス越しではありますが、ゆっくりと回転する展示台によって、前面と背面の両方にある特徴のある文様を観察していただくことができました。また、三月三日に開催した設楽ダム発掘調査成果報告会『新設楽発見伝４』の時には試作段階の一体のみだった「ハート形土偶のペーパークラフト」も十体以上が完成し、四月七日・八日の『考古学縁日』の「つぼ釣り」コーナーで大活躍しました。

「つぼ釣り」コーナーは、その名のとおりペーパークラフトの壺や銅鐸そして土偶などを、釣針で引っ掛けてそれぞれピタリと収まる「穴」にはめるゲームです。昨年初登場し、好評だったので今年は「穴」を増設しました。実は、その「穴」のモデルにしたのが、平成二十九年度に大畑遺跡の発掘調査で検出された竪穴建物跡三〇〇ＳＩです。しかも、遺構の実測図から平面形をおこしたので、実物どおりの柱穴の位置に壺をはめる「穴」があります。こうして縮小してみると、平面形が丸みのある多角形だというのも納得できますね。

（愛知県埋蔵文化財センター　永井邦仁）

春の埋蔵文化財展

展示中のマサノ沢遺跡出土土偶

つい夢中になる「つぼ釣り」コーナー

「つぼ釣り」の「新作」大畑遺跡 300SI

設楽発掘通信 No.36

編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話　（0567）67-4161【管理課】　4163【調査課】
ホームページ　http://www.maibun.com
Facebook　https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter　https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　安西工業株式会社